

## 安中散

出典:『和剤局方』一切気門

以来本方は緒方書の噎膈門(食道癌類似症)、反胃門(胃癌類似症)、癰囊門(胃拡張症)などに採録されて、胃疾患の特に胃痛を治す薬方として諸家の薬囊中に伝えられてきた。

条文:「遠年<sup>〇</sup>日近、脾疼翻胃、口に酸水を吐し、寒邪の気内に留滞し、停積して消えず、胸膈張満して、腹脇を攻刺し、悪心嘔逆、面黄肌瘦、四肢倦怠するを治す。又婦人血氣刺痛、小腹より腰に連なり、<sup>疼</sup>攻主重痛するを治す、並びに能く之を治す。」

方後には、「右細末となし、毎服貳錢、熱酒にて調下す。婦人は<sup>〇</sup>淡醋湯にて調服す。もし酒を飲まざる者、塩湯を用いて点下す。並びに時に拘らず。」

解説:年を経た慢性のものでも、発病日尚浅きものでも、胃に疼痛を発し、あるいは嘔吐はげしく、酸性液を吐くものもあるが、これらは寒冷の邪気が胃内に停滞して胃内停水となり、停滞蓄積して飲食物を消化せず、胸脇張り苦しく、腹胸部を攻めて痛みをなし、悪心や嘔吐を起こすのである。病人は顔色悪く黄色を呈し、栄養衰え、四肢倦怠を訴える。この方はこのようなものを治すのである。また一面において婦人の気鬱血滞<sup>〇</sup>による疼痛が下腹より腰に連って、牽引性の疼痛を訴える者にもよく奏効することがある。この散薬は、熱い酒にて服用することになっている。婦人の場合には薄めた酢でもよい、酒を飲まないものは塩を入れた湯で飲む。しかも、随時服用してもよいことになっている。

処方構成:[原典]甘草(炒拾両)、玄胡索(去皮)、良薑(炒)、乾薑(炮)、茴香(炒)、肉桂(各五両)、牡蠣(七両)。

[東医研]桂枝 3 延胡索 3 牡蠣 3 茴香 1.5 縮砂 1 甘草 1 良姜 1 .

構成生薬の大部分が芳香健胃薬・鎮痛薬で、味が辛く、温熱薬に属している。それゆえ新しい潰瘍や、炎症性のものには用いられない。

桂枝は鬱気をめぐらし、腹痛を治し、延胡索は経を通じ、胸腹痛をしずめ、神経性疼痛を軽減させる(駆瘀血性鎮痙鎮痛剤)。牡蠣は胸痛を除き、また酸を中和させる薬能があり、茴香は胃を温めて寒による痛みを解消させる。良姜は気を下し、中(胃)

ヒドリ菌: 吳茱萸湯

柴胡桂枝湯

を温めて神経性疼痛をしずめる作用がある。

桂枝、延胡索、良姜、縮砂、茴香などはみな気剤として働き、気の鬱滞をめぐらせ、胃の機能を振興し、鎮痛の作用を発揮する。局方が一切気門に掲げた所以である。

臨床上的の使用目標：脾胃の虚寒と気鬱血滞による胃痛というのが主目標。

・瘦せ型で皮膚筋肉の弛緩傾向、顔色蒼白(貧血性)、言語に力なく応答不活発。  
・頑固に繰り返される食後あるいは空腹時の心窩部痛が主訴。食欲不振、嘔吐、胸やけ。  
・便通は普通か便秘。下腹部から腰背部に及ぶ牽引性疼痛があれば慢性胃炎であつても慢性膵炎であつても時には月経痛であつても用いる。但し、温性の処方であるから、急性の炎症性の疾患には不適當で、TVで見かける宴会のシーンをバックにしたCMは目標を不適切にさせる心配がある。冷たい物、ビールなどの過飲で冷えたときにはよい。服用して却って痛くなるようなら半夏瀉心湯か柴胡桂枝湯などがよい。あるいは柴胡桂枝湯と合方することもよい。

・脈：浮洪で無力、あるいは沈細で遅の場合もあるが総べて虚脈。但し発作時に弦を帯びることがある。

・舌：舌苔は無いが、あるいは薄い白苔で湿っている。

・腹証：腹力軟弱(時に軽い緊張)、腹部動悸(臍傍)、胃内停水。一般的には、柴胡桂枝湯の一段虚したものと考えてよい。

\*心下痞硬して、腹筋が緊張するものは柴胡桂枝湯加牡蠣、小茴香の証で、この証が遷延して虚状を呈したものが安中散の証である。更に虚して腹部軟弱となり症状の激しいものは丁香茯苓湯(楊氏：丁香、茯苓、附子、半夏、橘皮、桂枝、乾姜、縮砂)の証である。

臨床応用：神経性胃炎、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、胃酸過多症、胃下垂症、慢性胃炎、婦人の血気刺痛(鬱血を兼ねた神経性疼痛)、月経困難症、悪阻、冷え症。また、胃腸の弱いタイプの慢性関節リウマチに使用することもある。神経過敏の不眠症によいことがある。アニサキス症によいという報告がある。

\*神経質症の種々の疾患でストレスがかかるとその破綻症状が胃にくるタイプの人に長期的に使用する。

加減：安中散加茯苓 腹部動悸を伴うものは茯苓5を加えるとよい。腹部大動脈の拍動が亢進しているというのは虚証の徴候であるから、この腹動を治してかつ虚を補うために茯苓を加えている。

漢方医学の治療は、全体療法であることが特徴であります。生きた個人を相手に内科的に治療するためには、その治療が全体療法でなければならぬのは当然であります。われわれの生命体は一つの全体として、生命の維持発展、生殖などの目的に向かって活躍するのであります。生命という概念は、生命体を構成しているそれぞれの要素とは関係のない、全体的な概念でありますから、このように考えますと、生命を取り扱う治療学が、全体療法でなければならぬのは当然のことです。このため漢方医学では、生命体の一部、例えば指先のしもやけのようなものでも、結膜炎のようなものでも、慢性の胃炎でも、みな全身の調和を整えることに治療の方針が置かれるわけであります。(中略)

またある婦人患者が来まして、慢性胃炎で胃の下垂症があつて治療を乞いましたので、安中散という処方方の薬を与えました。安中散は、慢性に経過する腹痛を主訴として、冷え症で、血色が悪くて、腹壁が弾力に乏しく、臍のあたりでよく動悸が高まり、それから胸やけがあつたり、口に水が上がってきたりするものを目標にして用いる薬であります。その患者はこれを飲むと、二カ月余りですっかり元気になりましたして休薬しておりました。

ところが、三、四カ月経ってまた前の患者が来まして、また胃が悪くなりましたというのであります。診察しましたが、どうも妊娠のようで、三カ月位になっているのではないかと思われのお腹なのです。これはつわりでしょうといいましたところ、その患者は、私は十六年間も妊娠しないので、子供をもらつて、その子供がいま小学校へ行つております。妊娠するはずはありませんというのであります。そして私の診察に半信半疑ですから、婦人科を紹介して診てもらつたところが、確かに間違ひなく妊娠であるということになりました、患者も驚きましたが、安中散で妊娠するということよなことは、本には一つも書いてありませんし、安中散で妊娠したという例も初めてでありますからわかりませんが、とにかく妊娠したということは間違ひないことで、その子供ももう今は大人になっております。

これは安中散で胃腸が丈夫になって、全身の調和がうまくとれたから妊娠したと考えるしか考えようがありません。そうしますと、妊娠しないのは子宮が悪いとか、卵巣が悪いとかというように考えないで、やはり全体の体の調子を整えることが先決問題ではないであろうかと考えるわけでありませう。このように考えますと、漢方では何々の薬、何々の病の薬と決めてしまふのは非常に無理です。すべての薬が全身の調和を整える作用を持つていると考える方が正しいのではないのでしょうか。

安中散 散散

散散とHNする

サTク

## 無月経に安中散

『先哲医話』(浅田宗伯)・和田東郭の項に、経閉つまり生理が無くなってしまったときに使った例が出ている。

「経閉、逐瘀の諸剤を与えて治せざるものは安中散、抑肝散などを与えて、効を得る。これ皆、南風を得んと欲すれば必ず北窓を開くの理なり。」

逐瘀の諸剤とは、例えば桂枝茯苓丸とか桃核承気湯のようないわゆる駆瘀血剤のことである。後半は有名な言葉で、南の風を入れようと思ったら南だけでなく、北の窓も開ければよく入ってくるという意味で、思わぬところに治療法があるのだということを行っているのである。

「延年腹痛を患うもの、安中散加姜黄。朝食暮吐するは、いにしえの胃反也。滯囊は水飲胃中に停滞し、痛み強く水を吐す。胃反は脈虚数、飲食化せずして吐す。滯囊より重し。(中略)滯飲の痛みは苓桂甘棗湯あるいは安中散によろし。」

反胃でなく、胃反という言葉を使っている。飲食化せずとは、食べたものが消化しないということである。

「和田東郭言う、婦人経閉などに桃仁、紅花、虎杖、蘇木を用いるは素人療法なり。安中散にて経を通ずることあり。その経、閉するは何故ぞと工夫して対証の薬をもちうれば、必ずしも血薬を用いずとも通経すべし。」

〔1〕方説弁解／福井楓亭(1725～1792年)

安中散はもともと反胃<sup>㊟</sup>に用いる方剤であって、甘草を主として良姜、乾姜、茴香の類を佐<sup>㊟</sup>とし、腹中を緩め温める功があり、癍囊病<sup>㊟</sup>で腹痛、嘔吐し、甘を好むものに用いると大いに効果がある。(中略)またこの処方<sup>㊟</sup>を反胃に用いるときは、腹痛を目的とし、腹痛のないものには外台反胃大駟<sup>㊟</sup>の方が優れている。

外台反胃大駟方(げたいほんいだいけんほう)：前胡、阿膠、麻子、呉茱萸、桂枝、甘草、大棗、生姜の8味(外台)。

〔2〕養英館療治雑話／目黒道琢(1739～1798年)

安中散は、寒気が胃口に滞り、胸腹脹満、心下刺痛などの証をなすものを治す。この処方<sup>㊟</sup>を疝<sup>㊟</sup>に用いるときは、心下痞満して痛み、嘔吐、呑酸などの証をなすものに用い、また小腹が痛むものにもよい。この処方<sup>㊟</sup>は、要するに疝に留飲を兼ねる証を治すものと考えてよい。疝積、反胃嘔吐などに用いる場合に注意すべき点の一つあり、腹部が虚軟、脈もまた虚で力なく、脾胃に寒があるか、または痛みが久しく脾虚の候のあるものに用い、多少でも熱候のあるときは用いてはならない。

〔3〕蕉窓雑話／和田東郭(1744～1803年)

癍囊の症は、脾胃のめぐりがわるく、いつとなく胃中に水飲を畜えること<sup>㊟</sup>によって起こるのである。(中略)渴して多く飲むことによって畜聚<sup>㊟</sup>し、やがて吐水する。吐けばまた渴を生じ、飲んでまた吐するために連綿として止むことなく、後には食物を吐くようになる人もある。これがその症の大略である。(中略)またこの症に腫氣、腹痛を伴うこともあり、大体において小水は利するが、大便は多くは秘結する。(中略)癍囊の症を、世医の多くは反胃と見誤りやすい。また久腹痛などからこじれてこの症になるものもある。治法は食禁を守らせることが第一の手段であるが、薬剤も普通一般の病のように一度に多く用いるとよくないので、ごく小剤にして、1日に1貼ずつ用いる。主方は脈症腹症によっていろいろ手段もあるが、まず大抵は安中散でよいものである。

〔4〕叢桂亭医事小言／原南陽(1753～1820年)

安中散は、癍囊病を治すのに神驗がある。酒、肉、麵、餅、一切の厚味<sup>㊟</sup>、塩、茶を忌む。  
厚味：味の濃いもの。

〔5〕校正方輿輓／有持桂里(1758～1835年)

安中散は、癍囊、反胃に穩当至良の方剤である。急・慢性を問わず用いてよい。また男子の寒疝、女子の帶下瘕聚<sup>㊟</sup>で、小腹から腰に引っ張って、攻疰重痛<sup>㊟</sup>するものにも効がある。ある男が癍囊を患ったが、『和劑局方』の方後の記述に「熱酒調下」とあるので、試みに熱酒で安中散を飲ませると、腹痛が少し和らいだようである。そこで毎日続けさせると痛みが次第に止み、百日ばかりで全治した。以来これを数百人に試みたが、すべてよい結果を得た。安中散の妙は、熱酒調下にあるのである。学者たるものは、方後の記述に注目する必要がある。

〔6〕梧竹樓方函口訣／百々漢陰(1773～1839年)

安中散は、疝、痼冷<sup>㊟</sup>で脾胃の回りがわるく、心下に水気を多く畜え、嘔吐腹痛するものに用いる。炙甘草を多くして用いるとよい。さらに一段と寒氣留滯の甚だしいものには附子を加えて用いてよい。また婦人の血氣刺痛<sup>㊟</sup>にもよい。

〔7〕勿誤藥室方函口訣／浅田宗伯(1815～1894年)

世上、安中散は癍囊の主薬としているが、吐水の甚だしいものには効かず、痛みの甚だしいものを主とする。反胃に用いる場合にも腹痛を目的とすべきである。また婦人の血氣刺痛には、癍囊よりかえって効果がある。

第一例 胃潰瘍(胃痛の疑)

高○善○ 四十四歳 男子 初診昭和二十七年一月五日

〔主訴〕 本患者は三年前にもしばしば胃痙攣を繰り返えし毎月一回一週間ぐらい臥床することが半年ほど続いた。右臍傍に擗指頭大の硬結様抵抗を触れ、家族歴に胃癌や子宮癌が数人出ているので三回「レ」線検査も受け、わずかに幽門部の通過障害があり、胃液検査の結果酸欠乏症を起こしているので充分癌腫の疑があるので試験開腹を奨められていた。当時私は五積散や香砂六君子湯などを与え、服薬三カ月ほどで痙攣もなくなり、体重が一〇キロも減少したのを完全に取り戻し得た。このたびの初診時の訴えは約十日ほど前から再び心下部疼痛が始まったが、以前のように七転八倒する痛みではない。朝起きる頃や、食後一時間ぐらいに痛むという。疼痛は左臍傍に、絞めつけられるように痛み、三十分ぐらいジッと耐えて寝ていると解消する。

〔診候〕 体格は普通、栄養はやや衰え、顔色はそれほど悪くはないが元気なく、顔貌苦悶状である。皮膚筋肉弛緩し軟弱、脈は浮かんで大きく弱く按ずれば消え去る。舌はやや白苔があるが湿潤している。腹は食事を控えているので陥没し、全面に抵抗も緊張もなく軟弱、心下水分の辺りから左臍傍天枢穴の辺りにかけて著明な動悸を触れ、左臍傍において動悸の処を按すと痛む。疼痛もこの場所に起こるといふ。疼痛が起こると左の背および腰にも波及する。食欲は悪くはないが、食後の苦しみが予想され、おそろしくてとれない。大便一行で、嘔吐も嘔雑もない。胃内停水を認める。

〔経過〕 脈状や腹候によれば脾胃の虚、停痰の症である。現代病名では慢性胃炎か胃潰瘍であろう。小野寺氏圧痛点(胃潰瘍)陽性で膝の下まで放散する。前回にならって五積散や加味平胃散、次いで香砂六君子湯などを与えたがさらに効果がない。このような虚証の慢性胃潰瘍の痛みに苓桂甘薑湯の有効だったことを思いだしてこの方に変えたところ、やや好転したが、即効とまではゆかない。そこで安中散加茯苓に転方すると十日の服薬で痛みの大半が消失した。引続き一カ月の服薬でほとんど全治廃棄した。以来一年半を経過するが再発もせず、家業に従事しているから癌腫の心配はないものと思われる。本例は酸水を吐いたり嘔雑を訴えるということは少しもなく、むしろ酸欠乏症で、しかも安中散の奏効した例である。

第二例 溜飲症 胃潰瘍?

谷○修○ 三十歳 男子 初診昭和二十七年八月三十一日

〔主訴〕 本患者は約一年半この方、ほとんど毎日、心下部不快感、起床時および食後一〜二時間の心下部疼痛に悩まされている。訴えは胃痛と嘔雑と苦味酸味のある溜飲の逆上、全身倦怠と食欲不振で一日二回しか喰べられない。

大便は一週に一回ぐらいで硬い。

〔診候〕 やせ型、顔色は蒼白で元気がなく、いかにも胃腸虚弱者を思わせる。脈は細くて弱い。腰部の小野寺氏圧痛は中等陽性で膝あたりまで放散する。腹部はやや陥没し、扁平胸、特に胸骨下部が陥凹している。胃内停水著明、皮膚筋肉はそれほど弛緩していないが筋骨薄弱型である。心下部は少しく抵抗を感じる程度で直腹筋もやや緊張している。胃内停水があり、左臍傍天枢穴に著明の動悸を触れるが痛みの場所はそれより上方二横指ぐらいの所である。

〔経過〕 初め五積散加黄連、山梔子を与えたが効果なく、次いで柴胡桂枝湯加牡蠣、小茴香に大黃を加えてみたがこれも無効である。旋覆花代赭石湯まで使ったがさらに効がない。前例のように腹部軟弱ではないが虚寒として安中散を与えたところ痛みは次第に減少し、この方を持続することにし、加大黄〇・五として約一カ月、疼痛は全く去った。非常に真面目な患者で引続き五カ月の間飽きずに服用し、腹痛から全く解放された。丹波家方的の痛む所を按じて動悸ありとの口訣には該当せず、臍傍の動悸は著明であるが、疼痛の場所は動悸と一致しない一例である。

方名		応用目標		処方	
一、大柴胡湯 (四逆散)	心下部急を目的とする心下の気充実し、痞硬緊張甚しく、 庄迫感あり、疼痛を訴える。筋骨隆々の肥満者に多い。胃 炎、胃酸過多症、胃潰瘍等にて実証のもの、脈沈実で力が ある。	柴胡六・〇 半夏 生姜四・〇 黄芩、大腹 芍薬三・〇 枳実二・〇 大黄 〇・五 一・	柴胡五・〇 半夏四・〇 桂枝二・五 黄芩、 人参 芍薬、生姜、大腹二・〇 甘草一・		
二、柴胡桂枝湯	大柴胡湯よりは心下部の痞硬緊張少く、休養もやや劣り、 直腹筋、腹壁緊張し、心下部の抵抗圧痛、胃部不快、庄重 感、呑酸、嘔雑あつて空腹時の胃痛を訴える。胃潰瘍の疼	柴胡五・〇 半夏四・〇 桂枝二・五 黄芩、 人参 芍薬、生姜、大腹二・〇 甘草一・			
三、黄連湯	胸中は熱し、胃中には寒状あり、氣上衝して心下部疼痛を 発し悪心、嘔吐あるもの、急性胃加答児の心下部疼痛が多	半夏六・〇 黄連、甘草、乾姜、人参、桂 枝、大腹三・〇			
四、小陷胸湯	小結胸の者は、正しく心下にあり、これを按ずれば則ち痛 み、脈浮滑の者を目標とする。心中煩を伴い、嘔雑甚しく 痛みを訴えるものにこの方の証がある。胃酸過多症。	半夏六・〇 括蕪仁三・〇 黄連一・五			
五、梔子甘草散	反覆転倒、心中懊惱、胸中塞り、心中結痛等の条文によ り、胃痙攣にて胸若しく転展反覆して苦しむものに用い	梔子三・〇 香鼓四・〇 甘草一・五			
六、清熱解毒湯	心下、上腹部における疼痛、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、胆石 疝痛、脾臓炎などにて、やや慢性に移行し、長びきたるも のに用いる。	蒼朮、生姜三・〇 川芎二・〇 枳実一・〇 山梔子 〇・六 黄連、陳皮、甘草 〇・五 乾 姜 〇・三			
七、順氣和中湯	心腹刺痛、胸痛、嘔吐、嘔雑を訴える胃潰瘍、十二指腸潰 瘍、胃癌(一時的緩和利)などに用いる。	茯苓、朮、半夏四・〇 陳皮、香附二・〇 甘草一・〇 黄連、山梔子、砂仁、神曲、生姜、			
八、枳縮二陳湯	胸中の痰、胃中の停水、心下を攻めて胃痙攣のごとく痛 み、腰背に遊走し、嘔吐を伴うもの、慢性胃炎、狭心症類 似症に用いる。	半夏、茯苓三・〇 陳皮、香附、厚朴、延 胡二・〇 枳実、砂仁、茴香、木香、草菓 乾姜、生姜、甘草一・〇			
九、芍薬甘草湯	胃痙攣にて腹筋板のごとく緊張し、心下部の疼痛はなほだ しく急迫の状態あるものに用いる。	芍薬五・〇 甘草五・〇			
一、良枳湯	時々胃部に痙攣性疼痛を發し、嘔吐を伴う。腹壁菲薄にし て弛緩せるもの、慢性胃炎、胆石症、脾臓炎等の痛みにて、 心下部痙攣せず軟弱にして疼痛長びくものに用いる。	茯苓、半夏六・〇 桂枝、大腹四・〇 甘草 枳実二・〇 良姜一・〇			
二、堅中湯	腹筋は軽く緊張するが腹力は弱く、胃内停水あつて疼痛、 嘔吐を伴う。胃潰瘍に用いる。呉茱萸、牡蠣を加える。	半夏、茯苓五・〇 桂枝四・〇 芍薬、大腹 三・〇 乾姜二・〇 甘草一・〇			
三、千金当帰湯	柴胡桂枝湯に似て、心下部腹筋の緊張は弱く、全体として 衰弱の状があり、胃痛を訴え、痛み背に放散するものに用 いる。胃潰瘍、腹部動脈硬化症の腹痛、狭心症類似症に応 用される。	当帰、半夏五・〇 芍薬、厚朴、桂枝、人 参三・〇 乾姜、黄芩、蜀椒一・五 甘草 一・〇			
四、安中散	本文中にあり。	桂枝五・〇 延胡、牡蠣四・〇 茴香三・〇 砂仁、甘草一・五 良姜 〇・七(加茯苓五・			
五、苓桂甘煎湯	胃潰瘍、胃酸過多症の長びきたる全身衰弱の傾向あり、膈 傍の動氣あつて痛み心下に逆上するものに用いる。膈腹と もに軟弱。	茯苓六・〇 桂枝、大腹四・〇 甘草二・〇			
六、小建中湯	腹筋軽く筋張り、腹力に乏しく、アトニー状にて疼痛ある 胃潰瘍に用いる。胃内停水あるものは半夏、茯苓を加える	桂枝、生姜、大腹四・〇 芍薬六・〇 甘草 二・〇 膠飴二〇・〇			
七、丁香湯	胃拡張症にて長びき、全身衰弱し、腹痛、吐水、嘔雑、酸 臭あり、夕刻食したるものを吐し、吐すれば痛み消散する というものに用いる。	牡蠣五・〇 茯苓五・〇 呉茱萸一・五 白朮 三・〇 橘皮一・五 枳実、人参、生姜、甘 草各一・〇			
八、丁香茯苓湯	久しく胃痛、嘔吐続いて衰弱はなほだしく、腹部陥没して 無力性となり、胃痛、嘔吐に苦しみ、膈傍の動氣強きもの に用いる。胃潰瘍、胃拡張症、胃アトニー症等。	茯苓、半夏六・〇 桂枝、陳皮三・〇 乾姜、 砂仁二・〇 丁香一・〇 附子 〇・五			
九、旋覆代赭湯	胃部膨満、あるいは胃逆蠕動あり、胃痛、呑酸、嘔雑、嘔 吐、吐水を伴い、膈腹軟弱、舌乳頭消失し、便秘勝ちの ものに用いる。胃潰瘍、幽門狹窄、胃癌(一時的緩解剤)。	旋覆花、大腹、代赭石三・〇 半夏五・〇 生姜四・〇 甘草、人参二・〇			
一〇、人参湯	弛緩性体質、貧血、疲れ易く、冷え症にして、裏虚し寒水 の症、心下部え、胃痛、下痢しやすく、胃内停水あり、脈 腹ともに軟弱。	人参、朮、乾姜、甘草各三・〇			
一一、烏頭赤石脂丸	心下部より背に遊走する激痛を繰り返えし、荏苒として癒 えざるものに用いる。枳縮二陳湯に似て裏寒の症である。	蜀椒、烏頭、附子、乾姜、赤石脂、蜜丸 とす。			

加減:安中散加茯苓 動悸を伴うものは茯苓5を加えるとよい。

臨床上の使用目標: 脾胃の虚寒と気鬱血滯による胃痛というのが主目標。

- ・瘦せ型で皮膚筋肉の弛緩傾向、顔色蒼白(貧血性)、言語に力なく応答不活発。
- ・頑固に繰り返される食後あるいは空腹時の心窩部痛が主訴。食欲不振、嘔吐、胸やけ。便通は普通か便秘。下腹部から腰背部に及ぶ牽引性疼痛があれば慢性胃炎であっても慢性膵炎であっても時には月経痛であっても用いる。但し、温性の処方であるから、急性の炎症性の疾患には不適當で、TVで見かける宴会のシーンをバックにしたCMは目標を不適切にさせる心配がある。冷たい物、ビールなどの過飲で冷えたときにはよい。服用して却って痛くなるようなら半夏瀉心湯か柴胡桂枝湯などがよい。あるいは柴胡桂枝湯と併用することもよい。
- ・脈:浮洪で無力、あるいは沈細で遅の場合もあるが総べて虚脈。但し発作時に弦を帯びることがある。
- ・舌:舌苔は無いか、あるいは薄い白苔で湿っている。
- ・腹証:腹力軟弱(時に軽い緊張)、腹部動悸(臍傍)、胃内停水。一般的には、柴胡桂枝湯の一段虚したものと考えてよい。

\*心下痞硬心して、腹筋が緊張するものは柴胡桂枝湯加牡蠣、小茴香の証で、この証が遷延して虚状を呈したものが安中散の証である。更に虚して腹部軟弱となり症状の激しいものは丁香茯苓湯(楊氏:丁香、茯苓、附子、半夏、橘皮、桂枝、乾姜、縮砂)の証である。

臨床応用:神経性胃炎、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、胃酸過多症、胃下垂症、慢性胃炎、婦人の血気刺痛(鬱血を兼ねた神経性疼痛)、月経困難症、悪阻、冷え症。また、胃腸の弱いタイプの慢性関節リウマチに使用することもある。神経過敏の不眠症によいことがある。アニサキス症によいという報告がある。

\*神経質症の種々の疾患でストレスがかかるとその破綻症状が胃にくるタイプの人に長期的に使用する。